

彗星だより

1928 a 彗星 その後方々でこの彗星は観測せられてゐるが、パークレイ天文臺のベルマン・ミホイプス兩氏は次の如き軌道を算出した。早く兩氏が出した極く大略の軌道からは大分改正せられて前に掲げたクロンメルン氏のものに餘程よく似てゐる。

近日點通過時	T	1928年1月31.07272萬國時	
近日點引數	ω	$8^{\circ} 39' 5.3''$	} 1928.0
昇交點黃徑	Ω	124 56 5.8	
傾斜角	i	8 3 45.1	
離心率	e	0.502786	
近日點距離	q	1.86636	
周期	P	7.23732年	

この彗星は最初からテラー彗星(1916年近日點通過のもの)に多分同一のものだらう。パークレイ天文臺のロイ・シユナー氏はいつてゐたのであるが、クロンメルン氏は大分これを疑がつてゐた。ところがヤーキースにゐる張氏が木星の影響を計算してみたところ大した擾亂を受けたりしないので全くこの彗星とテラー彗星とは同一のものではないといふことである。

1928b 彗星 この彗星の発見のことは前に誌したところであるが、その後に来た報導によるミバーセロナのコマス・ソラ氏が3月25日にとつた寫眞にはうつらなかつたそうである。しかし、パリ天文臺のミヌール氏が觀測による三十等半の明るさで3月28日萬國時23時0.2分の位置は

赤經 $6^h 12^m 26.s 5$
 (視位置)
 赤緯 $+14^{\circ} 57' 39''$

その日運動は赤經に $+3^m 16^s$ 、赤緯には $0'$ のことである。これを見る以前の報導の赤緯がゲンゲンかわつてゆくことあつたのは 90° だけ方向を誤まつてゐたものらしい。

その後マドリッド天文臺のカラスコ氏が觀測したので同氏は今迄の3つ

の観測から軌道を計算した。尙ほクロンメリン氏は最初の二つの観測とその運行の工合から軌道を計算してあつたのであるが双方よく似た値になつてゐる。

カラスコ氏		クロンメリン氏
近日點通過時 T	1928年3月26.9414萬國時	4月2.33萬國時
近日點引數 ω	$346^{\circ}16'.8$	$336^{\circ}58'$
昇交點黃徑 Ω	$195\ 21.3$	$206\ 33$
傾斜角	$2\ 48.0$	$3\ 13$
近日距離の對數 Log q	9.99764	9.9988

その後クロンメリン氏はカラスコ氏の観測を用ゐて、即ち全く同一の材料から軌道を算出してゐるが、昇交點黃經に 1° 以上の差を生じてゐる。これは全く計算にも人によつて功拙があることを示すものである。

他の彗星 昨年は今頃までには既に四つ五つの彗星が発見せられてゐる筈であるが今年は僅かに二つ発見せられたに過ぎない。尙ほ本年近日點へ歸つて來る筈の彗星はホルムスミテラーが期待せられてゐるが、ホルムスは既に豫定せられた近日點通過は過ぎ去つて終つた。たゞ地球からの距離はまだまだ近きづゝあるから滿更ら望みのない譯ではない。最も地球に近づくのは11月の初め頃であるが、しかし相當かすかなものだらうこの豫想である。

テラー彗星の近日點通過は10月終り頃で B. A. A. の Handbook に掲げられてある豫報位置は次の通りである。(1928 6 20 上田)

萬國時 Ob 1928	近日點通過を10月21日として			近日點通過を10月29日として		
	赤經	赤緯	南中時刻	赤經	赤緯	南中時刻
7月 17	$5^{\text{h}}\ 4.2$	$+13^{\circ}\ 6$	9時 24分	$5^{\text{h}}\ 14.1$	$+12^{\circ}\ 58'$	9時 3分
25	$5\ 25.7$	$13\ 49$	9 14	$5\ 53.5$	$13\ 24$	8 53
8 2	$5\ 47.7$	$14\ 24$	9 5	$5\ 57.5$	$14\ 2$	8 43
10	$6\ 10.2$	$14\ 50$	8 56	$6\ 19.9$	$14\ 22$	8 34
18	$6\ 33.2$	$15\ 7$	8 47	$6\ 42.7$	$+14\ 34$	8 25
26	$6\ 56.6$	$+15\ 14$	8 39			